

1 自己評価及び第三者評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2874500370		
法人名	社会福祉法人香美町社会福祉協議会		
事業所名	香美町社会福祉協議会香住ふれ愛介護センター認知症対応型共同生活介護事業所「かがやき」		
所在地	兵庫県美方郡香美町香住区無南垣96番地		
自己評価作成日	平成23年2月14日	評価結果市町村受理日	平成23年5月2日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigo-kouhyou-hyogo.jp/kaigosip/infomationPublic.do?JCD=2874500370&SCD=320
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 ライフ・デザイン研究所
所在地	兵庫県神戸市長田区菟乃町2-2-14
訪問調査日	平成23年3月4日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

「地域」「家族」「看取り」を重点項目として事業を展開している。 「地域」=畑の家の交流の他、地域行事や学校行事の参加、芋掘り交流会を実施。 「家族」=入居者も職員も一緒になって楽しいことは心から楽しみ、困ったことはみんなで考えよう。 入居者家族とのつながりも大切に。 「看取り」=ついの住処になるよう運営推進会議において協議を進め、家族会との意見交換を行っている。
--

【第三者評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

①理念に沿ったサービス提供。(9名の利用者が、住み慣れた土地で介護者の暖かい支援を受けながら、一つの家族として暮らしている雰囲気がある。利用者の生活歴や個性を重んじた個別のケアが提供されている。)②広い敷地とゆったりとした清潔な居住環境。(建物の共有部分や居室の面積をはじめ、中庭のウッドデッキや畑の面積が広い。また、皆が集うフロアは、見守りがしやすい設計になっている。)③地域交流。(認知症介護に関しては、その理解がまだまだ浸透していない土地柄でありながらも、開設以来、職員は努力を重ね地域との交流に積極的に取り組んできています。「畑の家」への定期的な訪問、地元の保育園、小学校、中学校との交流等に繋がってきており、その成果が多く見受けられる。)④研修体制の充実。(社協の全体研修をはじめ、職員の研修の機会が多く設けられている。)
--

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および第三者評価結果

自己	第三者	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「安心と尊厳のある生活」「入居者の受容と自立支援」「地域で普通に暮らす」前記理念のもと住みなれた場所で地域の特性を活かし、入居者＋職員＝家族という意識を持ち、看取りの取り組みをすすめていくことを共有している。	昨年度の重点目標として、地域住民との交流、家族のような関係、気分が「ほっとできる場所」を掲げて取り組み、成果が出てきている。看取りについては、家族の理解や医療との連携など、まだ課題が残っている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	「畑の家」での交流、佐津幼稚園園児・保護者との「芋掘り交流会」、近隣小・中学校の運動会、夏祭りや秋祭りなどのイベントの他に、買物や散髪など地域内に出るようになっている。	地域での買い物や近隣施設との交流など、積極的に取り組んで来た成果が出てきている。「畑の家」を地域との接点として、外出の機会も増えている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	上記、「畑の家」やイベントの参加が、理解や支援につながっていくと考えている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	今年度は年間6回の開催を計画しており、2月1日現在4回開催している。サービス内容の報告や評価の他、行方不明探索マニュアルを策定し、現在は看取りについて検討をすすめている。	2ヶ月毎に開催される運営推進会議から出てきたテーマを取り上げ、「行方不明探索マニュアル」を策定している。身近な気付きを掘り下げ、具体的なマニュアルとして作り上げている。	今後のテーマとして、看取りを取り上げているので、その成果に期待したい。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	日常的な情報交流の他、運営推進会議に健康福祉部長、地域包括支援センター係長の参画を得ており情報提供を行っている。また、地域ケア会議にて地域内の事業所に現状報告を行っている。	市町村担当者が運営推進会議にも参加しており、情報の共有や意見交換など定期的に行われている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束が及ぼす本人の身体的・精神的弊害、施設内の社会的弊害を各職員が理解し、夜間入浴時など安全確保が難しい場合を除き、玄関の施錠を含め、拘束は行っていない。	原則として、夜間や利用者の安全確保が困難な場合以外は玄関の施錠をしていない。カンファレンス時に職員間で身体拘束を無くす対応が確認されている。	身近な事例を用いての研修等の実施をし、職員の日常からの意識向上に期待をしたい。
7	(6)	○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃されることがないように注意を払い、防止に努めている	「言葉による虐待や拘束」は無意識のうちに行っている場合が多いため、特段の注意を払っている。虐待につながるようなアプローチは、ミニカンファレンス等で早期に検討している。	OJTの手法を用いて、具体的な取り組みがされている。ミニカンファレンスでも虐待防止につながる視点で打合せがされている。	

自己 者 第三	項目	自己評価	外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8	(7) ○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	現在、必要とされる入居者がいないため、管理者・計画作成担当者が制度を知るに止まっており、職員全員に制度の理解・活用はすすんでいない。	昨年当初、親族後見人の事例が会ったが、その後は具体的な取り組みはされていない。家族などに対し、制度の説明など今後の課題としている。	
9	(8) ○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	十分な説明のもと契約を行っている。更に必要に応じて代理人を設定していただくケースもある。	契約に関する説明は主に管理者が行っており、丁寧な対応がされている。	ホームでの一日の生活や、一週間の流れなどを説明する資料があれば、活用できる。
10	(9) ○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	12月に家族会と運営推進会との合同会議を開催し、意見交換を行った。看取りの推進希望があり、今後取り組みを進めていく。	年に1～2回は運営推進会議と同じ日に家族会が開催されている。看取りに対する取り組みなど、家族からの意見も出てきている。	
11	(10) ○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	ミニカンファレンス、定例カンファレンスにおいて、事業全体についての意見を職員から聞いている。行事計画は担当職員による企画のもと実施している。	社会福祉協議会の支所長は、年に数回会議に出席し意見交換をしている。また、事業所の行事にボランティアとしても参加している。	
12	○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	12月より人事考課を試験的に実施しており、各職員が向上心を持って働けるよう取り組んでいく。		
13	○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	管理者は認知症実践リーダー研修を修了している。職員は認知症介護実践研修を受講している。(全員修了をめざしている)		
14	○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	認知症実践リーダー研修、認知症介護実践研修、他施設実習、更に実習者受け入れを通じて交流を図っている。また、美方郡内グループホーム連絡会に参画し、交流を深め、質を高めている。		

自己 者 第三	項目	自己評価	外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援				
15	○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	事前面接をはじめとし、本人、家族のニーズ把握、要望等を受け止め、安心して生活していただける環境の構築に努めている。		
16	○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	上記と同様に、ご家族との信頼関係の構築は欠かせないことであり、看取りをすすめて行く上で、信頼関係は最重要ととらえている。		
17	○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居相談に来所される方も多くあり、必要に応じて他事業、他事業所の紹介を行っている。		
18	○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	「家族」の意識を持つことが職員のあるべき姿と考え、まずは「喜び」と「楽しみ」を共有するようにしている。		
19	○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	本人を中心に家族との連携を深めるようにしている。看取りを推進する上で家族の協力は欠かせないと考えている。		
20	(11) ○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	買物、散髪その他、地域行事の参加等、地域とのつながりを大切にしている。また、家族との外出や外泊、「かがやきだより」の発行を通じて家族とのつながりが途切れないようにしている。	地域行事への参加や、地元スーパーへの買い物、なじみの店へ出かけるなど、近隣との交流を行っている。	
21	○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	一人で過ごされる入居者はおらず、お互いの会話から思いやりの気持ちを持っていることを伺うことができる。職員は、こたつスペースとテーブルスペース(共有部分)の活用を意識し、お互いの距離の調整を行っている。		

自己 者 第三	項目	自己評価	外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22	○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退所後の相談も受けるようにしており、情報の把握をするようにしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント				
23	(12) ○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	入居者一人ひとりの日常での関わりの中で希望を把握するようにしている。把握が困難な方については、本人の言動や家族の意向を踏まえて検討している。	日々の会話記録の中からアセスメントしており、外出等につなげている。また利用者がお客様へお茶の接待も行っている。	一日に一枚のシートを用いて、すべての利用者の会話記録が書かれているが、一人の利用者を時系列で記載する方が活用しやすいのではないだろうか？
24	○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人、家族の関わりの中で把握するとともに、他機関との連携により把握をしている。		
25	○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	本人の希望する過ごし方を支援し、心身状態に関しては日々の変化を見逃さないようにしている。		
26	(13) ○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人の言動をもとにカンファレンスで課題を検討し、担当職員が介護計画書を作成している。状況の変化があれば見直しを行い、必要に応じて家族からの意見を得るようにしている。	介護計画の見直しは、利用者の状況が変化したときに随時行われており、家族や本人の意見を聞き、経過記録(モニタリング)を活用している。	
27	○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の気付きシートに記入し、朝夕の引き継ぎにおいて、その日の勤務職員で課題検討と情報共有を行っている。必要に応じてミニカンファレンスに移行させ、計画書に反映させている。		
28	○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	ニーズに応じて柔軟な対応をしている。		

自己	者 第三	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	畑の家、地域行事、近所のスーパーや理美容院などの資源を活用し、豊かな暮らしを支援している。併せて家族と本人の関係の継続についても配慮するようにしている。		
30	(14)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	連携医がかかりつけ医になっており、月2回の往診と定期検査により健康管理に努めている。病状によっては連携医の指導と本人・家族の希望に基づき基幹病院を受診している。	殆どの利用者は協力医をかかりつけ医としており、通所介護の看護職員とも連携して動いている。歯科も年一回の定期健診を行っている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	心身の変化について常時把握し職員間で共有することにより、看護師との連携をとっている。夜間、深夜、早朝については看護師と連絡をとれるようにしている。		
32	(15)	○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院加療時の本人理解を含め、医療関係者との情報交換を綿密に行い、本人・家族の意向をふまえて早期退院をめざしている。	協力医が地域の医療機関との接点となって動いてくれており、本人や家族の意向も聞いてくれている。	
33	(16)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	将来の暮らしについて話し合う機会を持つようにしている。現在、施設内での看取りについて協議をすすめている。	利用者のアンケートにも看取りを希望する意見が出されており、終末期に対する取り組みに対して事業所内で協議を進めている。	職員の研修を含め、家族や医療との連携など課題が多いが、実践に繋げるための前向きな取り組みに期待をしたい。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	救急対応についてはマニュアルを作成し、連携医の指導を仰ぐようにしている。		
35	(17)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	定期的に訓練をしている。自衛消防訓練年2回(内1回は夜間想定)地域防災訓練年1回	地域の防災訓練として、香美町の訓練に自治会として参加している。消防訓練は年に2回行っており、そのうち1回は夜間を想定して行っている。	なるべく多くの職員が、防火管理者資格を取るようには如何でしょうか？

自己	者 第三	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(18)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	職員は「親しみ」と「なれあい」が異なることを理解し、接遇対応をするようにしている。トイレ介助、入浴介助については特段の配慮を心がけている。	社会福祉協議会の全体研修などにも参加する機会があり、職員の意識は高い。入浴は原則として同性介助で行われている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人の思いを実現していただけるよう「寄り添う」支援をしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	食事や入浴の時間を本人の生活に合わせるように配慮している。(気分転換に入浴を勧める場合もある)また、天気の良い時など入居者の希望に応じ予定外のドライブや買物を随時行っている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	本人の好みの服装、髪型をしている。職員は着衣の乱れや汚れに配慮するよう心がけている。服を購入する際には、本人の好む色合いや生地を選ぶことができるよう支援している。		
40	(19)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	入居者の好き嫌いを把握し、季節感を取り入れた食事をしている。買物～食事片付けまで入居者と職員が一緒になって行っている。	ウッドデッキを利用して昼食会をしたり、夏にそうめん流し、年末に餅つきも行われている。献立は一週間単位で作られ、利用者の好みで、季節の山菜なども取り入れたりしている。	余裕があれば、家庭的な雰囲気を感じる食器の使用等にも視点をおいてみては如何でしょうか？
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	毎日の一人ひとりの食事量、水分摂取量は把握している。特に水分摂取については徹底して取り組んでおり、ウォーターサーバーを共有スペースに設置している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	食前、食後の口腔ケア、歯科医の訪問診療を行っている。		

自己	者三	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(20)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表の活用により全員トイレ誘導で対応している。	トイレへの誘導は、さりげない声掛けと、利用者の排泄リズムの把握で対応がされている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分摂取量の確保、食物の配慮、排泄時の工夫などを個別に行っている。		
45	(21)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	夜間浴を実施している。本人の希望による入浴も可能である。	毎日の午後を中心に入浴の機会が設けられ、2日に一回の割で入ってもらえる。多い人は毎日入浴し、声掛けや見守りがされている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	個別の行動パターンを把握し、休息、安眠ができるように工夫している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	職員は説明書を確認し、症状の変化を観察するように心がけている。配薬は看護師が行っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	外来客の接待や洗濯物たたみ、畑仕事など得意分野を活かし、生活に張り合いを持っていただいている。個別に喫茶店に行くなどして楽しみ事を作っている。		
49	(22)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	日常的に外出は行っている。「藤の花見学」や「七夕まつり」「余部鉄橋渡り終え」「回転すし」など季節や時事に合わせた外出も行っている。	外出への企画は全職員が係っており、公共交通機関などを用いた取り組みもされている。初詣や節分の豆まきなど、季節に応じていく場所を考えている。	

自己	者 第三	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	自分自身のお金を流通させる重要性は認識しているが、現在お金を所持している入居者はいない。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話のやりとりや手紙の投函支援は日常的に行っている。		
52	(23)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	清潔に心がけ、入居者と職員が一緒になって掃除をしている。共有スペースには絵や人形を飾り、心なごむように配慮している。	全体的に広くてゆとりのある空間がある。中庭のウッドデッキも積極的に活用がされるようになった。家族やボランティアとの関わりも大切にされている。	他のグループホームへの見学等の機会を作ってみては如何でしょう？
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	テーブルスペース、こたつスペース、個室前ベンチ等、希望に応じて入居者同士の距離が調整できる作りになっている。併設している通所介護事業所にも移動可能であり、行き来する人もある。		
54	(24)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	家族の協力を得ながら工夫をしているが、十分ではない入居者もある。	部屋の出入り口には飾り棚があり、画一的になりがちな面を少なくする努力がされている。アセスメントを各個人の生活につなげる点では、更なる努力が必要と感じている。	利用者個々の住み心地の良い部屋(個別対応)という視点で、各個人の心身状況に応じた居室環境の工夫に期待をしたい。
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	玄関センサーや窓のダブルロックにより、徘徊に対応するようにしている。建物内はバリアフリー仕様になっており、テラスを含め安全に移動できるようにしている。		